

# 美味しいビールは バンド仲間と一緒に・・・。

札幌市医師会  
札幌中央病院

すだ ゆうし  
須田 祐之

子育てもようやく一段落し、妻のそろそろ「好きなことをしてみてもいいのでは？」の一言で、学生時代に吹いていたサックスのケースを開けた。吹けるか不安だったがなんとか音は鳴る。確かに自分で吹いていて楽しいのではあるが、「さて、これからどうしようか」と悩んだ。そんな時妻に、「今流行りの大人の音楽教室に通ってみては？」と勧められ、とりあえずその教室に足を運んでみた。スタジオの中には8人程の生徒さんがおり、サックス、ピアノ、ギター、ドラム、ベース（この方が先生）に別れて演奏していた。女性も3人ほどおり、私より少し若い方々がジャズのスタンダードを演奏していた。テーマが終わると、次々にソロを回していく。いわゆるアドリブというやつである。コードだけ見て直感で曲を作っていくのである。「へー」と感心して見ていたら、「須田さんもやってみてはどうですか」と言われた。「え？」と戸惑っている間に自分の番が回ってきた。急いでケースからサックスを取り出し、とりあえずワンコーラスを必死で吹いた。なんだかよくわからなかったが、みなさんから拍手を頂き、とても気持ちがよかった。言うまでもなく、このあとすぐに申し込み、1ヵ月に1度、レッスンを受けることになった。それからというもの、その日が来るのが楽しみで毎日家で練習した。妻からも「好きなことが見つかってよかったですね」と言われ、ウキウキしながら過ごしていた。自分はゴルフもできず、これといった趣味もなかったが、学生時代にやっていた経験が役に立ったようだ。教室の仲間は全く医療とは関係ない人たちで、変に気を遣うこともなく、みなさんと楽しくレッスンを受けることができた。

この教室での1ヵ月に1回のレッスンにも慣れてきて、もう少し機会を増やしたいと教室の友達に話したところ、「札幌市内でセッションという形で吹くところがありますよ。そろそろ挑戦してみてもいいのではないですか？」と勧められ、意を決して札幌のライブハウスに足を運んだ。そこは私のようなアマチュアの他にも、時々プロも訪れる場所で、自分には場違いのようにも感じた。「今さら恥ずかしくてがってもしようがない。いつもの通りに演奏しよう」と、思い切って知っている曲に参加し、必死に演奏した。できが良いのか、悪いかは分からなかったが、「とりあえず迷惑はかけてない」と勝手に思い込み、その後も数曲参加させてもらった。緊張の

連続ではあったが、レッスンとはまた違った楽しさがあった。

その後は時間があるときに、お店のセッションに顔を出すようになっていった。

そんな時、思いがけずお店のマスターから「ウイークデイの空いている時にライブやってみませんか？」と声をかけられた。自分が人前でライブをしていいのか正直迷ったが、これはチャンスと思い、3ヵ月の時間をいただいて、練習に励むことになった。同時に学生時代から半ばピアノのプロとして活躍している高校の同級生（現消化器外科）にサポートをお願いし、彼と共に音楽活動をしているドラム、ベースの方にも参加していただき、バンドを結成。ライブまでの3ヵ月間、防音室まで購入して、毎日夜遅くまで練習に励んだ。バンドメンバーとも合わせる回数。私以外のメンバーはプロとして活躍されており、恐縮しながら練習に参加させてもらっていた。あまりの恐縮ぶりに、「そんなに緊張しなくていいですよ。伸び伸びやってください」と言葉をかけていただいたが、かえって緊張の度合いは増し、早いフレーズを間違ったり、ますます自分の演奏が萎縮してしまう始末だった。

そうこうしてるうち、ライブの日がやってきてしまった。お店には友達、親類、音楽教室の仲間が駆けつけてくれて、ほぼ満員状態。MCもしたことがないのに、曲紹介やメンバー紹介、さらにトークまでも行い、そのうえ演奏は人前で披露したことのない曲ばかり。ライブ中はかなり舞い上がってしまい、自分が何をしているか分からないまま時間が過ぎ、気がついたら最後の曲までたどりついていて、ありがたいことにアンコールまで頂き、最後まで曲を吹き上げて、無事にライブを終えることができた。打ち上げで飲んだビールは驚くほど美味しく、皆で写真も撮っていただき楽しいひとときを過ごすことができた。

この歳になり、こんなに打ち込めることに出合えるとは思わなかったが、このような機会を得ることができたのも、協力してくれた友人、妻、家族のおかげであり、感謝の念に堪えない。

現在も同じメンバーでのんびりとライブを続けており、メンバーが支えてくれる間は皆に頼りながらライブ活動を続け、これからも美味しいビールを飲んでいきたいと思っている次第だ。